「どんな庭師になりたいですか？」

“What kind of garden craftsperson do you intend to become?”

半田　さなえ　*Sanae HANDA*

植彌加藤造園株式会社　庭園修景部
UEYAKATO LANDSCAPE Garden Department

どんな庭師になりたいですか？

庭に携わるとはどういうことか。どのようなアプローチがあるのか。私が今の会社，植彌加藤造園に入社した時，多くの先輩から「お前はどんな庭師になりたいんだ？」と尋ねられた。それは女性であり，背も低く，モジモジしてか弱そうな新入社員の私をからかっているとも取れなくもないが，そんな私の心の内に，どんな熱い夢や希望があるのか探りながら，先輩の方から歩み寄ってくれていたのであると，今では思う。しかし大学を卒業したばかりで，社会に出るということも，庭を仕事にするということもぼんやりとしか掴めていなかった私にとって，まして庭師の中にもまた「どんな」になりたいのか，というこの質問は衝撃的であり，返答に悩まされた。入社して２年半になるが，今の私の働く姿は学生時代にはとても想像できなかったであろう。それだけランドスケープの領域が広がり，庭師のスタイルも多様化している。選べるというのは幸せなことである。

庭との出会い，京都へ

庭師を目指すきっかけとして，一番分かりやすく，多く挙げられるのが「実家が植木屋だ」という理由であるが，私の実家は植木屋ではなかった。東京都港区のお洒落なブティックが集まる街で父はカメラマン，母はモデル・歌手という（私にとっては普通であるが）面白いと言われる，明るく楽しい家庭で育った。日常で自然を感じる機会は貴重であったので，その分かえってその機会を得た時には，五感で受け取る全てが新鮮で衝撃で無意識に吸収されていったのであろう。

中学の修学旅行で京都を訪れた。ある庭を見たとき，その衝撃と感動で庭から目が離せなくなった。「庭の眼が開く」という表現がしっくりくるのであるが，風に揺れる木々と，じっと静かな石と，水面と魚とを，目に入る全てを焼き付けたいと思い，必死に風景を眺め落とし，周りの音が聞こえなくなるほど集中した。不思議な体験であった。これが私が庭と出会った瞬間であった。

庭が仕事に繋がったのは，出会いがあったからである。元々気持ちも迷いがちであった私の背中を押してもらって，庭師を目指すことができた。東京を出て京都に大学進学し，平安時代の作庭書「作庭記」の研究をした。平安時代の庭造りを現代に読み知ることができることが興味深かった。空き時間には自転車であちこちの庭を見て回った。

「庭が好きで，庭師になりたいんです！」と純粋な気持ちを伝え，ご縁を繋いでもらった。あらゆる場面で何度も緊張したが，ここで遠慮したら庭師になれないと自分を鼓舞し，感謝をもってこの道に飛び込んだ。

暑い日も寒い日も庭師を目指して

朝は７時から会社周りの掃除と現場の準備をする。７時30分に朝礼があり，８時頃現場に着き，10時･12時･15時に休憩を挟んで17時まで現場作業をする。帰社後は今日の片付けと明日の準備をする。これが何十年も変わらない，現場の１日の流れである。

仕事の現場は寺社，個人宅，料亭，学校，山などがあり，長い間ご縁を頂いている方もいて，新しく出会う方もいる。現場作業を大きく分けると管理と工事に分類される。

入社してすぐには１人前の仕事はできない。掃除・除草をする日が続き，その時が来たら木に登らせてもらえる。松の葉むしり，ツツジの刈り込み，樹木の剪定，施肥など時期ごとの作業があるため，１年を通して経験して慣れていく。横について丁寧に説明して下さる先輩もいるが，「見て習え」の文化なので言葉数は少なく，黙々と作業を進めながらチラチラと見て真似をする。仕事の種類は多様で，植木に触るだけではなく，池掃除，竹垣作り，蜂の巣駆除，樹木剪定時の交通誘導など庭に関わる範囲は幅広い。

１人前に仕事を任せてもらえるには10年ほど修行をする。20年30年と長く働く人もいるし，一人親方として独立する人もいる。若手は技術を身に付けて早く現場を任せてもらえるように仕事を覚える。

暑い日も寒い日も庭にいて，「庭師」という果てしない道のりを進んでいく。成長は急には見られず，できることよりできないことの方が多い毎日にもがきながら，少しずつジワジワと伸びて，ある時，以前の自分より少し向上したなと気がつく。気を抜くと毎日が同じことの繰り返しの様に感じてしまうが，自分に足りないこと，知らないことは山のように溢れている。

名勝無鄰庵庭園の「野花担当」としての広がり

南禅寺畔に佇む名園，無鄰菴は明治 27 年から 29 年にかけて造られた山縣有朋の元別荘であり，昭和 26 年に国の名勝に指定された文化財庭園である。文化財庭園を育成管理するには，その庭園が持つ本質的価値を顕在化させる必要がある。つまり無鄰菴らしさを追究して庭園に現していくことが求められる。無鄰菴には開放的な芝生空間があり，そこで野花を生かすのも，本質的価値を現す一例なのである。一般的な日本庭園では野草が生えた場合，それは人の手によって植えられたものではないため雑草とみなされ除草される。しかし無鄰菴ではそれらを愛でる対象とみなし，野花を生かした芝生管理を行っている。

野花が本質的価値に繋がると判断される手がかりは二つある。一つめは庭園内にある石碑「御賜稚松乃記」である。これは明治天皇が山縣有朋に松を下賜されたことを記念して建てられた。ここには有朋自身が無鄰菴に込めた想いが記されている。その一文に

「苔の青みたる中に名も知らぬ草の花の咲き出たるもめづらし」

とあり，名前も知らない草の花，つまり野花を愛でていたことが分かる。また二つめは明治 42 年に発行された『京華林泉帖』[1] である。無鄰菴の紹介文には「野花」の文字があり，掲載された古写真には野花が咲く様子が写っている。

入社してすぐ，無鄰菴で野花の調査をしないか，と声をかけていただいた。「野花」という言葉の響きが可愛らしく，二つ返事で「やります！」と答えた。しかし当時の私は野花の知識はさっぱり無かった。芝生に行って野花を見つけては写真を撮り，図鑑やインターネットでひとつ一つ同定した。無鄰菴の芝生には年間通して約 50 種類の野花が生育している。中には外来種や，繁殖力が強すぎて芝生を傷めるものもあるので，何を観賞して何を除草するのか決めて管理した。播種や施肥は行わず，主に手引き除草と芝刈りのみで野花を管理する。いつの時期にどの種類をどのような方法でどのくらい除草するのか，経験を積み重ねて景色を作っている。

正直に言うと，立派な庭師になる為に技術を身につけることを夢見ていたので，野花の調査の為に事務所に籠る日々には葛藤があった。先輩庭師さんたちの一部には現場か事務所か中途半端な人には技術を教えたくはない，という雰囲気がかつてはあった。また，後輩ができてもすぐに追い抜かされ，後輩が剪定した枝を片付けるのは屈辱であると感じる日もあった。それでも「出る杭は打たれるが，出過ぎた杭は打たれない」と励まされ，野花の調査を継続した。

2016 年の秋，日本造園学会関西支部大会で発表する機会を頂き，技術報告集にも掲載していただいた。学会活動を通して庭園研究のフィールドを覗くことができた。

また，無鄰菴の来園者にガイドツアーとして野花の話をする機会があった。どうすれば野花の魅力が伝わり，楽しんで頂けるか考えた。日本各地から，ある時は海外から来た方々と野花を通じて知り合えるのは嬉しいことである。

写真－1　無鄰菴芝地にて野花を説明する（右筆者）。

その他にも，違う土地や環境で同じように野花の研究や育成をされている方に会ったり，更に深く知識をお持ちの専門家にお話を伺ったりした。野花を通じて様々な方と交流することが，日々の研究や働き方を見直すきっかけとなっている。

これからのランドスケープの仕事

冒頭で「庭に携わるとはどういうことか。どのようなアプローチがあるのか。」と投げかけたが，実はその明確な答えはまだ出せていない。庭は日本全国にあり，それぞれ地域性がある。時間軸で見ても上古から平安，室町，江戸，明治と刻々と姿を変え，新しく生まれたものと，失われたものとは庭園史の中から探ることができる。庭はどっしりと存在してきたために，地域的にも時間的にも広がりがあり，携わり方も携わる人も様々である。

つい 3 年前，この仕事を実際に始めるまで，私は今の働く姿を想像できなかった。きっとこれからも私の動き方と心持ち次第で「庭師」は色々な表情を見せてくれるであろう。「庭が好きだ」という単純な気持ちと，大きな感謝をエンジンにここまで来たが，現在私がここにいるのは長い歴史の中の 1 点であり，広い世界の 1 点である。まだまだ見えないほどの微小な存在であるが，庭園に居られる一人として，次世代にバトンを渡せるようにもっともっとしっかりと，輝いていきたい。

（略歴）

1992 年東京都生まれ。京都造形芸術大学歴史遺産学科卒業。2015 年より現職。庭師見習いとして現場作業に励む傍ら，名勝無鄰庵庭園にて野花の調査を行う。平成 28 年度日本庭園学会全国大会（足利大会），平成 28 年度日本造園学会関西支部大会にて発表・関西支部賞受賞。日本造園学会『ランドスケープ研究 VOL.80 増刊技術報告集 2017』（No.9）に「名勝無鄰庵庭園における本質的価値としての野花を生かした芝生管理のあり方」（阪上富男・加藤友規：共著）を投稿し，掲載される。

参考文献

1）湯本文彦（1909）：京華林泉帖：京都府庁